地域の方みんなが参加できる交流の場をつくりたい

つながろう CO・OPアクション情報 41号

コープふくしま・コープみらい

2014年3月1日、コープふくしま・コープみらいが、福島県郡山市日和田の仮設住宅で「ひなまつり企画」を行ないました。被災地では、人びとが交流するための場づくりが進められていますが、参加者が固定化してしまうことが課題の一つとなっています。コープふくしま・コープみらいが企画する交流の場では、一般的に参加が少ないといわれている男性や仮設住宅近隣の借り上げ住宅に住む方も来やすいよう、工夫が凝らされています。

埼玉でも福島でも双葉町の方に寄り添って

コープふくしま・コープみらいは、福島県双葉町からの依頼を受けて、同町民が暮らす福島県内の仮設住宅4カ所を毎週順番に訪問し、さまざまな支援活動を行なっています。

コープみらいの双葉町民への支援は、双葉町の住民が東京電力福島第一原発事故で埼玉県加須市に避難した当時から始まっています。旧騎西高校避難所での毎週木曜日の炊き出しや「おしゃべりサロン」、避難所から全員が退去した後にも、月に一度の「子どものあそびのひろば」の開催を加須市内で継続するなど、多岐にわたり支援活動を実施してきました。また、埼玉県・福島県それぞれでの交流の場の実施など、支援活動を続けています。

男性が女性をもてなすイベントを開催

14年3月1日、郡山市日和田の仮設住宅集会所で、コープふくしま・コープみらいが共催する「ひなまつりイベント」が開催されました。

今回の企画は、参加した女性を男性が手料理でもてなすといった趣旨で、「ケーキ型のちらし寿司」と

この日は、コープみらい コープデリ熊谷センターから、中富 久センター長（写真手前）、福ケ迫 忠副センター長が職員ボランティアとして参加。

「アジのなめろう（おろしたての新鮮なアジのたたきに、みそや香味野菜を混ぜた料理）」作りが行なわれました。

この企画の経緯を、コープふくしま・生活文化グループの松崎美智子さんは、「コープみらいさんからの発案で、年末に餅つき大会を開催したところ、男性がたくさん来て、率先して餅をついてくれました。このように、男性が参加しやすい企画をもっと増やせたらと思っていたところ、参加者のある男性から『魚がさばける』という話を聞き、今回はその方に魚をさばいていただき、女性へのおもてなし企画をしようということになりました」と話します。

その男性は、自前の包丁で15尾のアジを巧みな手つきでさばいていました。他の男性参加者は、アジの骨を取ったり、ちらし寿司にのせる錦糸玉子を焼いたり、飾りサーモンを巻いたりと慣れない料理に苦戦しながらも、楽しそうに話しながら調理をしていました。

巧みな包丁さばきに、作業を忘れて見入る男性参加者たち。

ケーキ型ちらし寿司となめろう。

魚をさばいた男性。みんなからの「おいしい」の言葉に笑顔。

一人ひとりのやりたいことをサポートしていきたい

コープふくしま　生活文化グループ
松崎美智子さん。

松崎さんは、交流の場の企画についてこう話します。「先月は、参加者の提案で、仮設住宅の外に出て、ボウリング大会も行ないました。みんな何かしらやりたいことがあるはずです。それをサポートするのが生協の役割だと思います。たくさんの方と交流し、目標を持って次のステップに進みたいと思えるような場をつくりたいですね」

日和田の仮設住宅の餅つき大会では餅を多めにつき、のして、同じ郡山市の富田町の仮設住宅に持って行き、キャベツ餅（キャベツを炒めたものに、一口大にまるめた餅をからめる。郡山市逢瀬町でよく食べられている）にしてみんなで食べたそうです。松崎さんは、「仮設住宅の場所は離れているけれど、元は同じ町民だった人たちです。何かしらこうやってつながりもつくっていけたらと考えています」とその思いを語ります。

ひなまつり企画に参加していた、近隣の借り上げ住宅にお住まいの方からは、「仮設住宅の方向けの企画はたくさんありますが、借り上げの住宅に住む人も参加できるイベントはあまりありません。こうやって呼んでいただけるのはとてもありがたいです」といった声が出ていました。

一つの仮設住宅というコミュニティーだけでなく、外に広がり、住民一人ひとりがその地域で住みやすくする取り組みが、ボランティアらの思いとともに広がっています。

待ちに待った食事の時間。

避難先から帰ってきた お母さんが交流できる場を

東日本大震災 中央子ども支援センター 福島窓口

震災発生から2年がたった頃から、福島県外に避難をしていた方々が福島県に戻り始めています。その中には、福島の現状について正しい情報が得られず、漠然とした不安を抱えている方も多くいます。そうしたお母さんたちに寄り添う取り組み、「ままカフェ」が、2013年6月より始まっています。

子どもたちは、ひなまつりの飾り作りを保育士と一緒に行なっていた。

2月28日は、12人のスタッフが運営をしていた（写真は一部スタッフ）。後列右端が、ビーンズふくしまの富田 愛さん。

2014年2月28日、福島市保健センターで、「ままカフェ」が開催されました。「ままカフェ」は、東京電力福島第一原発事故の影響で県外に避難をした後、福島に戻ってきたお母さんを対象にした交流の場です。参加者同士が友達をつくったり、スタッフや参加者と意見を交換したり、福島の現状について知る機会にしています。

「ままカフェ」を開催するのは、東日本大震災 中央子ども支援センター※ 福島窓口。その運営を担っているのが、福島県から委託を受けた「NPO法人 ビーンズふくしま」です。13年6月、郡山市で実施された第1回目の「ままカフェ」を皮切りに、現在は、福島、白河、いわきの計4市に広がり、それぞれ月に1度、10時～12時の2時間、開催されています。スタッフとして、ビーンズふくしまのメンバーのほか、福島市では保健師、地域の子ども支援センターの保育士らが参加しています。

2月28日には、「NPO法人 放射線環境・安全カウンシル」の測定技術開発ユニットリーダーである佐瀬卓也（さぜたくや）さんと参加者が、放射能について話す座談会も行なわれました。これは、「ままカフェ」に参加していたお母さんたちから出た、「放射能のことについて勉強したい」といった要望に応えたものです。佐瀬さんは、講演の後、参加者から出された「子どもがどんぐりを集めるのが好きだが大丈夫か」「子どもが雪を食べてしまうが大丈夫か」などといった質問に、一つひとつ丁寧に答えていました。また、佐瀬さんからは、福島に生まれ育つ子が、福島の現状についてさまざまな観点から検証し、対処法を考える力を養成する「放射線教育」の必要性が提案されました。参加者からは、「それぞれの状況においてどのように対処したらよいのかが具体的に分かって安心した」といった声が多く聞かれました。

運営責任者であるビーンズふくしまの富田（とみた） 愛（めぐみ）さんは、「3月には、避難していた方、福島に住み続けている方、どなたでも参加できる『ファミリーday』というイベントも開催します。『ままカフェ』は現在は避難していた方が対象ですが、近い将来、そうでない方も含めて交流できるようになればいいと思います」と話していました。

また「ままカフェ」では、コープふくしまと日本生協連が行なっている、「家庭の食事からの放射性物質摂取量調査」の結果が参考資料として参加者に提供されています。お母さんたちが福島の現状を理解するための取り組みに、生協の活動もお役立ちしています。

講演の後、お母さんたちの質問に丁寧に答える佐瀬さん。

※日本子ども家庭総合研究所（社会福祉法人恩賜財団母子愛育会）が厚生労働省からの要請を受けて設置した。